

お庚申さん

真夏のうだるような暑さが、おそい夕暮れとともに少しずつやわらいでいた。

お荒神さんのひろばで、また蝉が鳴き始めている。

「夕べ、このお堂で夜なべのお庚申さんがあっての、うちの兄ちゃんがその集まりで聞いてきた話なんやけど、ぎおんでチークダンスゆうのをやっとなるそうなんや」

守が、年の離れた兄から仕込んだ話を、篤彦とタケシを相手に得意げに話している。

「チークダンスゆうて何や？」

「男と女が頼っぺたをひつつけて踊るダンスやそうや」さも嫌らしいものだと言わんばかりの口調だ。

「アツちゃんの母ちゃん、ぎおん行つきよるやろ」

タケシにそう言われ、一瞬どきまぎしたとき、守が割って入った。

「へんなこと言うなや。アツのお母はんは裏で料理を作っとなるだけや。仲居とは違うんぞ」

「そーや、そなたな踊りやこせんわ」

口までそんな言葉が出かかったとき、篤彦の目の裏に蛍狩りの日の夕希ちゃんの姿が浮かんだ。その瞬間、自分でも思いがけない荒げた言葉を吐いていた。

「仲居やったら悪いんか、そなたなこと何で言えるんや？」

誰に向けるのでもない、訳のない怒りだった。悪気のなかったタケシと、助け船を出したつもりの守は、あっけにとられた顔をした。

「そなたに怒るなや。面白げなきに中の様子がわかったら、三人でのぞいてみよう」と

思うただけなんじゃけに」

「芸者が悪いか良えか、オレ、知らんが」

タケシも心外だといわんばかりに言い添えた。

「わかった。チークダンスのことはさぐってみとくわ。明日もぎおんの調理場に野菜もって行くきん」

気を取りなおした篤彦は、守に問い返した。

「それより、さっき言うったお庚申さんの夜なべの集まり言うて何なんや？」

「お庚申さん言うんはの」守は声を落とし仰々しく続けた。「人の体ん中に三足の虫がおって、そいつは、夜、寝よるすきに抜け出して、その人の悪いところを神さんに告げ口しに行くそうなんや。ほじゃけん、夜じゆう起きて、その虫が抜け出して行かんように番をせないかん。それがお庚申さんの夜なべなんや」

「オレやの体ん中にそなな虫がおるっちゆうんか。気味悪い話やお」

「どんな虫なんや。三疋言うて何々じゃろ」

「その虫、子どもにもおるんか。大人だけにとり憑くのと違うんか」

篤彦とタケシは身を乗り出してきいた。

「だれの中にもおって、その人の命を奪うたり、損ねたりする鬼みたいなもんじゃいうとった」

「爺ちゃんは、ウチの神さんは御大師さんじゃ言よるぞ。寝よるときでも、ちよいちよいハンニヤシンギョー唱えとるわ」

「けど、神さんやこほんまにおるんかのお？」

三人は、互いの中に見えない虫を見すかそうとでもするるように、怪訝な顔を向けあ

った。

その夜、篤彦は奇妙な夢を見た。

お荒神のひろばをお堂に向かって、見たこともない二本脚の奇妙な怪物が足を引
きずりながらヒタヒタと歩いていく。裏手に回るところでふり返り真っ青な腹を
見せた。そして、その顔だけが自分なのだ。目が覚めたとき、恐ろしさに震えが
止まらなかった。悪い夢を追い出すように、何度も何度も首を激しく振った。

篤彦は、そのとき確信した。

「ぼくの病気はアイツのせいだ。アイツがぼくを中から壊そうとしている」

翌日、篤彦はぎおん用の野菜置き場から、まだ日向の匂いのしているトマトを十個
ほど竹の箆に入ると、好恵が魚の買い出しに出かける時間を見計らって調理場に
出むいた。小さな黒板に予約客の名前や行事が書かれてあるのを見るためだ。店の者
たちは、昼寝でもしているのだろうか。座敷も奥も妙に静かで、庭木の蝉の声が
一段と高く聞こえる。

調理場は半分が土間になっていて、手押しポンプとつるべのある井戸が二つあっ
た。財田川の地下水が豊富で、この辺りの家にはどこも井戸がある。井戸の上には、
氷の冷蔵庫に収まりきららない野菜や魚をいれた大きい箆が吊るされている。冷氣
が冷蔵庫の代わりをするのだ。そこにトマトを移しかえようと井戸の上に上半身を
乗り出すと、あがってきた冷氣で汗ばんだ顔が快い。その作業が終わったところで、
一つよけておいたトマトを手押しポンプの水で洗った。へたのきつい匂いが鼻をつ
く。それを両手でつかんで嚙ろうとしたとき、背後に人の気配がした。

「アツちゃんじゃない」

ふりむく間もなく、シュミーズ姿の和代が、下駄を突っかけてポンプの方へやってきた。水瓶のひしゃくを取ると、ポンプを一押ししてためた水をそのまま喉を鳴らせて飲んだ。そして、トマトに目をとめると、「ウチにも一口、食べさせて」と、篤彦の細い手を自分の口元に運ぼうとした。体が熱くなっていた篤彦は、とっさに手を引っ込めようとした。

「ちょっと待って。井戸で冷しよるきに」

そう言いかけたとき、白い歯がその実に噛みついていていた。なまぬるい汁が手首を伝わった。

「まだ青くさいなあ。トマトは真っ赤に熟れとるのが好きなんやけど」

息のかかりそうなくらい近くに、肩からむきだしになった白い腕があった。ほくろのある腕の内側に静脈が青く浮き出ている。汗と香水の混じった匂いを嗅ぎながら脇の下のかげりを見たとき、篤彦はさっきからずっと収まっていない動悸がいつそう大きくなり、股間が硬くなっていくのを感じていた。

「立った、立った」と守たちが、時々、はしゃいでいるアレだと思った。それに気がついてない和代は、トマトの汁で濡れた手を半ズボンの骨張った膝に置いて言った。

「なあアツちゃん、アツちゃんのこの足、なおったらええのんなあ」

「こそばいきに」とその手を押し戻しながら、

篤彦はシュミーズ姿にトキドキしている自分の中で、ふっと、三足の虫の別のやつが目を覚ましかけているような気がして怖じけた。

「体の中におる三足の虫ゆーの知っとな？」

「何のこと、腹の虫がおさまらんというのは、度々あるで。それより、ウチは男の悪い虫ならようけ知つとるけんどな」

和代に言ってみたが通じない。多分、誰にもわからないことなのだ。そう思うと、今はもう早くその場を去りたかった。立ち上がりかけた篤彦に和代は、おかまいなしに話しかけてくる。

「アツちゃん、よう勉強できるんやてな。母ちゃんが自慢しとったわ」

「本読んどるだけや、宿題や試験はすかん」

「あ、そうや、お盆に大阪の親戚に預けとるようこが、ここに来ることになってるんや。アツちゃん、勉強、おせーてやってな」

「何年生、どこの子なん？」

「ようこはウチの生んだ子や。ちゃんと学校へ行つとつたら六年生なんやけど、ずーと引越しが多てあんまり行つとらんや……」

「ようこのよう言うて、どんな字なん？」

「葉っぱの葉。五月生まれなんや」

篤彦は街から来るといふ女の子の頭を描きながら、薄暗い調理場からやつと外に出た。

庭を一回りし、お荒神のひろばを眺めた。いつも遊んでいる場なのに、こっちら見ると知らない場所のように見える。泉水のそばの植え込みがちよつと邪魔だが、座敷をのぞき込むには、ひろばの入口にある庚申塔の陰が一番よさそうだった。

チークダンスは土曜の晩にある。その日はいつもより早く食事をすませてお荒神さんに集まった。将棋の駒と紙で作った盤に、出たばかりの「冒険王」を持ちよる

と、三人はお堂の縁側に寝そべって暗くなるのを待った。

ぎおんの開けはなたれた座敷に明かりがつくと、庚申塔の石段の周りに陣取って、身をかめたり背伸びしたりしながら中をうかがった。床の間に大きい蓄音機が置かれている。

青白い蛍光灯の下に人影が現れ始めたとき、守が「あ、うちの兄ちゃんがおる。

随分、めかしこんどるが」とすっとんきような声を立てた。前髪を前に垂らし派手なシャツを着ていて恰好がいい。

「あ、前の魚屋のおっさんもおるぞ」

篤彦の頭の上で、タケシが秘密を発見したようにはしゃいだ。前掛け姿で氷を

ひいていたときとは大違いだ。

男の客が、ダンス相手に連れてきた女を入れると十人くらいはいるだろう。

浴衣姿で小太りの男がいる。先生と呼ばれている。どっかの校長かも知れない。

女将さんがついだビールをうまそうに飲んでいる。先生のそばの真面目そうな若い

男に、水玉のワンピースを着た夕希ちゃんが嬉しそうに寄り添っている。

男たちはいっちょうちの夏服を着こみ、ポマードで髪をとかし、ぎおんに集まって来たのだ。やがて、電蓄から「芸者ワルツ」や「月影の小径」や、金子座の映画の合間にかかる「赤と黒のブルース」などが次々に流れ出した。男たちは女の薄い夏服の背に手を回し、髪や肩に顔を埋めるようにして抱えついた。レコードがあまりないのか、同じやつが何回もかけられた。どんな曲が聞こえても、男と女は同じ恰好でしがみつきあったまま小さく揺れているだけだ。

「踊りいうたらもっと体を動かすもんと違うんか」タケシがじれったそうに守に

訊きいた。

「シート、黙だまつとれっっちゃ。盆踊ぼんおどりとはちがうじゃけん」

「〃乱みだれる裾すそも恥はずかし嬉うれし〃と歌うたうとるぞ。どーゆー意味いみや？」

三人さんにんは大人おとなたちの怪あやしげな饗宴きょうえんに息いきをひそめ、首くびをかしげたり、おぼえた歌詞かしを
眩つひやいたりしながら、裸はだかの脚あしにふえてくる蚊かの刺ほし痕せにもかまわず、時ときのたつのを忘わす
れて過すごした。

やがて、細長ほそながい簾すだれのカーテンの陰かげから、白しろいエプロン姿すがたの好恵よしえが、大おおきな皿さらにサ
イダーとスイカを持もって出でてきたとき、篤彦あつひこたちも強つよい喉のどの乾かわきをおぼえた。

(以上9月5日放送分)